

「呼び出された人生」

マタイによる福音書 9章 9節～13節

説 教 軽 込 昇 牧 師

聖書に登場する人物は、すべてわたしたちです。わたしたちは、主イエス・キリストによって呼び出され、弟子として召されました。

罪とは、神から離れてしまうことです。空を舞う凧が、糸が切れてどこかに飛んで行ってしまった、自由だ、と言っても、糸の切れた凧ほど惨めなものはありません。神とつながりキリストを救い主と信じ、初めて罪が分かり、罪が赦されているからこそ、わたしたちは安心して生きられるのです。しかも、わたしには赦していただく何の根拠もないのに、主イエスは十字架にかかって、わたしの罪を赦し、わたしを根本から変えてくださったのです。

イタリアの画家カラヴァジョが「聖マタイの召命」で描くように、徴税人マタイは座り込んで、周りの人から巻き上げた金勘定に夢中でした。そのマタイに目をとめ、関わり、呼び出し、新しい歩みをさせたのは、主イエスです。マタイの方には招かれる根拠は何もありません、ただ主イエスの憐れみだけです。あの時、主イエスがお声をかけてくださらなかったら、あとの人生も惨憺たるものだった。キリストに招かれ、従う者にされ、初めて本当のわたしになれた。マタイ(神の賜物の意)の偽らざる思いであったはずです。

「呼び出された人生」は、わたし自身のことでもあります。主イエスがわたしを呼び出してくださいました。あなたは、わたしに従ってこなければ、あなたはあなたではなくなる、という祈りと愛を込めて、わたしをも招いてくださいました。「わたしにつながっていなさい」。(ヨハネ福音書15章4節)これがすべての出発点です。何故、主イエスにつながってこなければならぬのか。何故、主イエスの召しに答えなければならないのか。わたしたちの中に罪があるからです。主イエスにつながらなければ、わたしたちの真実な姿が実現しないのです。

高校生で洗礼を受けたとき、何故、主イエスが十字架にかからなければならぬのかよく分かりませんでした。主イエスは神の子なのだから、赦すと一言おっしゃればよいではないかと。ある時、親友に裏切られたと思い、腹が立って、腹が立って、謝ってきて、絶対に赦すものか、といきまいていました。その時、気がついたのです。神が人間を愛しておられるのに、人間がその神に対して罪を犯したならば、その人間を赦すためには、水に流すと、なかったことに

するのでは罪を赦したことにはならない、とやっと分かったのです。神が人間を赦すためにはその人間に代わって神の子が十字架にかかる必要があったのだ。しかも、他人ではなく、わたしにもっと深い罪があることに気づき、その罪が、キリストによって赦されたとわかりました。以来、キリストがわたしのために十字架にお掛かりくださったのだ、と素直に言えるようになりました。わたしにとって「呼び出された人生」というのは、神への罪をキリストが赦してくださった、ということと、かたかく結びついています。

わたしたちをご自分とつながり続けさせてくださるのは、主イエスご自身です。主イエスご自身が願い、熱心に祈ってくださっているから、わたしたちも信じ続けられるのです。

マタイは座り込んでいた所から立ち上がり、不平不満をつぶやくだけの世界から一歩を踏み出し、甘えの世界から一歩を踏み出しました。彼は仲間たちを集め、一緒に主イエスの話を聞き始めました。仲間と共に礼拝を始めました。「一緒にイエスという人の言葉を聞いてみませんか。わたしは不思議な人に出会いました。そのお方の言葉には不思議な安らぎがあります、力があります」、そう言って、友だちを誘ったのです。

一方ファリサイ派は、信仰の内容も、生活態度も真剣でした。しかし、自分の物差しで神の恵みも、主イエスのことをも測り、自分のぬくもりの中にとどまり続けたのです。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなくて、病人である」(12節)。彼らは自分は健康な人間であると考えていました。このファリサイ派の人々も、またわたしたちの姿です。

「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(13節)。キリストの宣言です。主イエスの前に正しい人はひとりもいません。誰もが罪人です。同時に、キリストに招かれている罪人です。「行って学びなさい」(13節)。主イエスは今もわたしたちを呼んでおられます。行きましょう、主イエスのところへ。そこはわたしたちの本当の姿が実現するところです。そして仲間を発見するところです。仲間と共に礼拝する道を歩みましょう。

(記 説教要約奉仕者)